

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32618

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12243

研究課題名（和文）17世紀の女性画家・照山元瑠に関する基礎研究

研究課題名（英文）Fundamental Study on Shozan Genyo, who is Japanese Woman Artist in 17th Century

研究代表者

中村 玲 (Nakamura, Rei)

実践女子大学・研究推進機構・研究員

研究者番号：80745175

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、学問や詩歌に優れ、江戸時代前期を代表する文化人としても高名な後水尾法皇の8番目の皇女であり、多くの絵画や書跡を残した尼僧・照山元瑠（しょうざんげんよう、1634-1727）の制作活動の実態を、作品の悉皆調査を通じて考察したものである。制作年の明らかな作品の博覧や、落款における筆跡、署名内容、印章などを検証することにより、絵画や書跡の年代的推移を示し得た。また、元瑠が多く描いた「観音図」、「後水尾法皇像」を検討することにより、制作時期や作品をめぐる交友関係などが指摘でき、元瑠の制作活動を実証的に解明することが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本における17世紀の女性画家研究において、画歴が迎れるほどの作品や文献史料が現存する人物は非常に僅かである。本研究において、照山元瑠による絵画、書跡の悉皆調査や史料の精査を通じ、制作活動の一端を提示したことで、17世紀の女性画家を展望する基礎的な研究をさらに充実させることが可能となったといえる。また、本研究における元瑠作品の落款や賛、箱書などの基本情報をもとに、制作背景や伝来の経緯等について提示し得たことは、江戸時代前期の皇女、尼僧の制作活動を理解する上で大きく歩を進めるものとなったと考える。

研究成果の概要（英文）： Through a comprehensive survey of Shozan Genyo's (1634-1727) work, this study examines the actual conditions of her creative activities. She was the eighth daughter of Emperor Gomizunoo, who excelled in scholarship and poetry, was famous as a representative cultural figure of the early Edo period, and a nun who produced many paintings and calligraphic works.

By examining the handwriting, signatures, and seals of her works, all with a clear production year, I was able to show the chronological transition of the paintings and calligraphic works. Furthermore, by examining her paintings "Kannon" and "Portrait of Emperor Gomizunoo," it was possible to locate the period of production and friendship surrounding the works, while empirically elucidating Shozan Genyo's production activities.

研究分野：日本美術史

キーワード：女性画家 後水尾法皇 観音図 尼僧 落款 黄檗宗

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究者は女性画家に関する研究を継続的に行っており、17世紀前期、宮廷社会を中心に画家や書家、歌人として活躍した小野通女(1567~68-1631)について調査を進めてきた。その中で、江戸時代前期を中心に、文化史、女性史等の表舞台では多くは語られないものの、優れた絵画や書跡等を残した女性たちが存在するという認識に至った。照山元瑠(光子内親王、普明院宮とも。1634-1727)もその一人であり、制作に秀でた女性とされる一方、その評価は定まっていない。こうした観点から、作品の悉皆調査や文献史料の精査を通じ、元瑠の制作活動を実証的に考察し、江戸時代前期の女性画家として日本美術史上に位置づけるべきであるという考えに至った。

2. 研究の目的

歴史的に見て、男性画家と比較して女性画家が制作した作品は少なく、具体的な活動を記録する一次史料も寡少であるため、その実態については不明確な点が多い。17世紀頃より、僅かではありながらもようやく画業を辿ることのできる女性画家が現れ始める。その中の一人であり、後水尾法皇の皇女、また尼僧として、観音信仰や黄檗宗寺院等と深く関連し制作を行った照山元瑠に焦点を当て、彼女の活動の様相を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

京都、滋賀、大阪等の関西地区をはじめ、全国の寺院や研究施設に所蔵される、元瑠による絵画、書跡の悉皆調査を実施した。作品の基本情報をもとにデータベースや印譜を作成し、画風、様式などの特徴から年代的推移を確認した。また、賛、箱書などの情報により、制作背景や伝来の経緯等について詳細な検証を行った。同時に、元瑠に関連する文献史料を収集、精査し、制作した作品や、それを介した人的交流等に関する情報をまとめて年譜を作成し、彼女の活動を実証的、体系的に解明することを目指した。

4. 研究成果

照山元瑠は94歳という長寿を全うした中で、制作活動を行った時期については先学において論究されないままであった。年記のない作品も多く、活動の実態が不明瞭であったが、絵画・書跡作品の可能な限りの悉皆調査の結果、以下の内容が明らかとなった。

まず、元瑠の作品において最も初期のものは、絵画では寛文12年(1672)黄檗宗の名僧である木庵性瑠(1611-84) 隠元隆琦(1592-1673) 賛《観音乗蓮図》(米国・メトロポリタン美術館蔵、元瑠39歳時)であった。書跡では延宝4年(1676)5月《法華経 観世音菩薩普門品》(京都・穴太寺蔵、元瑠43歳時)である。元瑠は、幼少期より皇女として絵画や書跡等の教養を身に付けた後、絵画については嘉永3年(1850)起筆の朝岡興禎『古画備考』および明治17年(1884)古筆了仲『扶桑画人伝』によれば狩野安信(1613-85)に、書跡は父である後水尾法皇周辺に学んだとされている。これらの具体的な時期は明確ではないものの、上記の制作年から、30代頃までには師の指導により絵画、書跡を本格的に学習していたものと考えられる。また、宝永3年(1706)から同7年(1710)制作の《観音図》(東京・祥雲寺蔵)の箱書によれば、元瑠は黄檗画僧の卓峰道秀(1652-1714)にも絵画を学んだとされるが、元瑠筆の諸本の特徴から、卓峰道秀に学んだのはより年齢を重ねてからであると推察される。

また、宝永元年(1704)71歳時に制作の《後水尾法皇像》(京都・泉涌寺蔵)をはじめ、宝永期(1704-11、元瑠70代)以降、制作年が明らかな作品が増加し始める。さらに、宝永6年(1709)5月、75歳時に制作された《法華経普門品》など、70代後半から晩年にかけて、書跡の点数がさらに増加していくことが判明した。天和2年(1682)49歳で林丘寺(臨濟宗)を開いた元瑠は、宝永4年(1707)74歳で退隠するが、退隠前後に制作活動の充実が図られたものと見なすことができる。

次に、落款に着目すると、筆跡や署名内容、用いる印章の年代的推移が確認できた。元瑠の署名は基本的に楷書体であり、謹直な書きぶりが特徴であるが、年齢を重ねるごとに書体が右上がりになる傾向や、部分的な省略が認められた。80代以降の高齢期の例では文字が細長く鋭くなり、少しずつ筆跡が弱まっていく一方で、各所の寺院からの依頼により寺号を大書する額字の場合では、高齢期においても丁寧かつ力強さや厳しさも見られた。署名内容については、初期作品では自らを「光子内親王」と記すが、林丘寺開山後は「聖明山林丘寺主人」、「林丘寺照山」など、退隠後は「普明院元瑠」などと変遷が見られ、退隠後の高齢期においても一部では「光子内親王

普明院」とするほか、「普明院元瑤九十一歳書」、「普明院九十二老尼照山元瑤書」と、高齢を自ら意識して年齢を書き添える例が認められた。

用印では、元瑤の作品に多く捺される特徴的な印章「庄穎」朱文入隅長方印・中に昇り龍降り龍（約3.7×1.7 cm）について、特に絵画作品に多く見られ、書跡に捺される例は極めて少ないことを指摘した。また、「元瑤之印」白文方印（約2.3×2.2 cm）が捺される作例には、署名を伴う場合、あるいは他の印章とともに組み合わせられる場合、もしくは署名を伴い、他の印章とともに組み合わせられる場合が多く、最も汎用性が高いものであることが判明した。元瑤の絵画は、「観音図」の点数が最も多く、次いで「後水尾法皇像」が多く描かれるが、無款の作品については画題の幅が広いことがわかり、仏画、禅画、神としても信仰された歴史上の人物、花鳥画等と分類し得た。

続いて、元瑤筆「観音図」の実見調査や一次史料の調査の結果からは、さまざまな構図が見られるものの、大きな頭光を伴い、両手を腹前に組み、雲上に立って来迎する姿の作例が最も多く残されていることを確認した。作品に付随する史料からは、これらは元禄14年（1701）1月から宝永3年（1706）元瑤67歳頃から73歳頃に描かれたことが明確となった。東京・祥雲寺（臨濟宗）、滋賀・浄光寺（黄檗宗）といった、自身が帰依した宗派の寺院に伝来するが、観音信仰で著名な京都・清水寺（法相宗）や、神奈川・遊行寺（時宗）など、他宗派の上人とも交流し、作品を下賜したことが指摘される。また、従来の研究では浄光寺蔵の作例の賛者については等閑視されていたが、筆跡や署名の検討の結果、後水尾法皇の孫に当たり、黄檗宗との縁も深い近衛家第20代・近衛基熙（1648-1722）であることも判明した。

元瑤筆「後水尾法皇像」の調査の結果、元瑤は父・後水尾法皇の影響で黄檗宗に篤く帰依したが、元瑤筆「後水尾法皇像」は、滋賀・地安寺、浄光寺、京都・仏国寺、閑臥庵、萬松院、大阪・慶瑞寺といった、父や自身が興隆に寄与した黄檗寺院に多く伝来することをあらためて提示することができた。これらの図様はほぼ同一でありながらも、作例間において相違点が見られ、祖本である堯恕法親王（1640-95）狩野探幽（1602-74）筆《後水尾法皇像》（大阪青山歴史文学博物館蔵）を踏襲しつつも、元瑤独自の創意や解釈、あるいは父である後水尾法皇への敬慕をもって一連の「後水尾法皇像」を制作したのではないかと推察した。また、これらの作例は元禄11年（1698、元瑤65歳時）から宝永5年（1708）頃までに描かれたものと見なした。

元瑤の作品は、非公開の尼門跡寺院に伝来するものが多く、いまだ実見調査が実現していない作品もあり、今後の調査によって、以上の成果を更新する可能性も十分にあり得るだろう。しかし、制作活動を把握する上で、本研究の成果は元瑤のみならず皇女（尼門跡）研究にとって有用なものとなったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 中村玲	4. 巻 第269号
2. 論文標題 尼僧による信仰と美術	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊 禅文化	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村玲	4. 巻 第141号
2. 論文標題 黄檗寺院旧蔵、現蔵の照山元瑤筆「後水尾法皇像」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 黄檗文華	6. 最初と最後の頁 93 106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村玲	4. 巻 第271号
2. 論文標題 王昭君図 勸戒画への発展	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 108 116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村玲	4. 巻 第35号
2. 論文標題 照山元瑤筆「観音図」に関する考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践女子大学美術美術史學	6. 最初と最後の頁 19 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002173	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村玲	4. 巻 第14号
2. 論文標題 照山元瑤の落款に関する試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 崇城大学芸術学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 107 127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村玲	4. 巻 第18号
2. 論文標題 亀井少琴筆《墨菊図》について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践女子大学香雪記念資料館館報	6. 最初と最後の頁 31 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002234	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村玲	4. 巻 第17号
2. 論文標題 雲英女史筆《花鳥図》、《唐美人図》について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践女子大学香雪記念資料館館報	6. 最初と最後の頁 48 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002144	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村玲	4. 巻 第33号
2. 論文標題 勝田竹翁の画業と款印に関する考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 実践女子大学美術美術史學	6. 最初と最後の頁 27 42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村玲	4. 巻 第16号
2. 論文標題 江馬細香筆《竹石図》について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 実践女子大学香雪記念資料館館報	6. 最初と最後の頁 33 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 中村玲
2. 発表標題 18世紀の女性画家・徳巖理豊の制作活動に関する考察
3. 学会等名 第58回社会文化史学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村玲
2. 発表標題 女性画家・照山元瑤の絵画をめぐる検討 観音図を中心に
3. 学会等名 第55回社会文化史学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 仲町啓子監修、児島薫、山盛弥生、太田佳鈴、中村玲、田所泰、鈴木美有	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 289
3. 書名 江戸時代の女性画家-実践女子大学香雪記念資料館所蔵 女性画家作品図録-	

1. 著者名 水野裕史監修、守屋正彦、榎山満照、森橋なつみ、勝木言一郎、日高衣紅、鷲頭桂、中村玲、畑靖紀、宇野瑞木、高橋真作、北澤菜月、寺田早苗、林麗江、薬師寺君子、井川義次、松島仁、塚本磨充、山澤学、杉本欣久、林みちこ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 300
3. 書名 アジア遊学271 儒教思想と絵画 : 東アジアの勸戒画	

1. 著者名 中村玲、金子さおり、今田雄代、石井頼子、首藤圭介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 杉並区立郷土博物館	5. 総ページ数 72
3. 書名 棟方志功と杉並 「荻窪の家」と「本の仕事」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------